京都新聞　令和3年（2021年）7月4日　（日曜日）　朝刊　紙面より許可を得て転載。

令和3年（2021年）7月4日　（日曜日）　朝刊

天眼

言葉は究極のデジタルである

永田　和宏

〈隙間産業〉なんですと私は言っているが、言葉と言葉の隙間に敏感にならなければ歌は作れない。

翻って、政治家の言葉は、まことにデジタルを絵に描いたようで、愕然とさせられることが多い。「感染対策に万全を期し」「国民の命と健康を守っていく」「専門家の意見を伺った上で判断したい」など、コロナとオリンピックを巡ってだけでも、嫌というほど同じ言葉、決まり文句を聞かされることになる。

コロナ対策は、緊急事態宣言などを発するだけでは、一般の人々の共感や協力を得ることがむずかしい段階に入っている。

２０２０年3月にドイツのメルケル首相が行った演説は、自身が旧東ドイツの出身であり、移動や行動の自由がいかに大切かを身に沁みて感じている人間としての言葉が強く人々の心を打った。２０２０年の「今年のスピーチ」にも選ばれたというが、わが国においても、出来合いのデジタルな言葉を並べるだけではなく、自分の言葉で、共にこの困難を乗り越えようと訴える政治家の言葉こそが待たれているのかもしれない。

（ＪＴ生命誌研究館長、歌人）

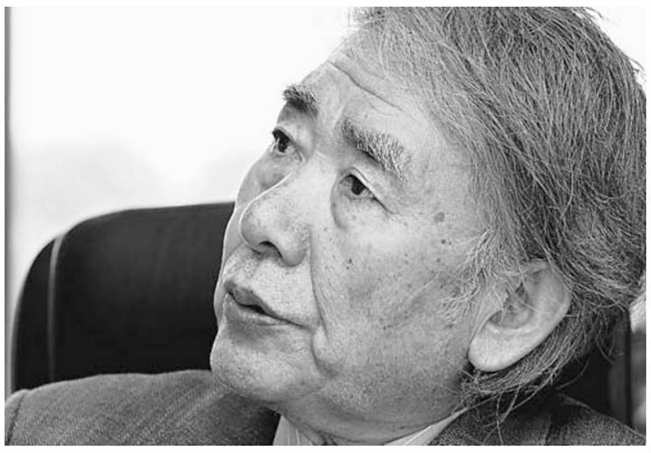
デジタルという言葉も、すっかり一般に定着したようだ。デジタル庁なる機関も作られるようで、９月からスタートするという。

その前に、当該長官の問題発言ばかりがクローズアップされ、ある企業には「死んでも発注しない」とか、「グチグチ言ったら干す」とか、「脅しておいた方がいい」などという音声データが公表されてしまった。「ＩＴ化やデジタルトランスフォーメーションの推進を目的とし、デジタル社会の推進に貢献する」といったスマートな設置目的からは正反対の、やくざの親分的発言が正式発足の前に見え見えになってしまって、いかにも日本的な茶番である。

デジタルの語源はよく知られているように、指（ｄｉｇｉｔ）に由来し、指が１本、２本と数えられるように整数の離散数を言う。一方のアナログは連続量であるところに本質があり、数字で何時何分を教えるデジタル時計に対して、秒針や分針の連続的な動きから時刻を読みとるのがアナログ時計である。

デジタルと言うとすぐさま数字が思い浮かび、言葉はその対極にあるようにも思われる。なにしろ言葉は数えられないし、「得も言われぬ」感情を表すこともできるのが言葉。どう見てもアナログである。

私は歌人としての生活を長く続けてきた。歌人、俳人、詩人、あるいは小説家や脚本家も含めて、言語表現に関わる人間は、しかし、常に言葉のデジタル性と闘っているというのが実感である。個人の思いや感情はアナログであり、その切れ目のない思いを言葉で表現しようとすると、途端に言葉の有限性と離散性との対決に愕然（がくぜん）とするのである。



たとえば形容詞。桜を見て「ああ、美しい」と言っている分には問題はないが、それは私が見た桜の美しさを何一つ表現したことにはならない。形容詞というのは、最大公約数を表現するデジタル値に過ぎない。日常の場で体験するリアルな感激は、そのような有限のデジタルな素材（形容詞）では表現し尽くせない。自分でも輪郭のわからないアナログなものなのである。

われわれの感情や思い、あるいは思想は、有限の言葉に沿って生まれるものではなく、なんとか自分の実感に近い言葉を、ある場合には言葉の組み合わせを利用して表現しようとするものなのである。いわば、言葉と言葉の間、隙間にあるものこそが表現の対象なのである。

言葉と言葉の隙間に不定形に広がる感情をいかに救い上げ、しかも不自由な有限の言葉で再現できるか、そこに創作のむずかしさと楽しさがあるだろう。「非加付番無限を加付番有限の言葉で対応させよう」とするのが表現であるとするなら、これは数学的には本来不可能な作業には違いない。その不可能に挑戦するのが創作活動なのだと私は思っている。歌人は

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

© 京都新聞社　無断複製・転載を禁じます